フィールド・シンポジウム

動物相から見た「龍谷の森」

谷垣　岳人

里山における生物相調査は、チョウ類をはじめ多くの分類群で行われている（石井ほか, 1993; 武内ほか, 2001）。しかし1つの里山林を調査地とした幅広い分類に渡る生物多様性の実態調査はほとんどない。そこで「龍谷の森」の生態系を明らかにするため、幅広い分類群に渡る生物相を2004年から調査している。ここでは哺乳類・鳥類・昆虫相の調査結果について紹介したい。

・哺乳類

哺乳類相の主な調査は、赤外線カメラによる無人撮影である。赤外線カメラは、2005年に林内10カ所に設置し、月に数回撮影データを回収している（好廣ほか, 2006）。ネズミ類はシャーマントラップを設置して調査した。コウモリ類はバットディテクターを用いて調査した（Hill & 鈴木, 2007）。さらにルート上に5m間隔で設置した番号杭を利用しフィールドサインの位置を記録している（谷垣ほか, 2005）。これらの結果、16種の哺乳類を確認した。

・鳥類

鳥類は、2004年から2006年まで毎月1回、日の出から約1時間かけて林内のみのルートセンサスを行った。その結果、49種の鳥類を確認した。このうち「龍谷の森」で繁殖している可能性がある種は24種であり、この数は、林の面積と鳥の種数との関係を調べた先行研究（樋口ほか, 1982）から推定される種数よりも10数種ほど多い。この理由は「龍谷の森」が鳥類の生息環境として孤立しているのではなく、他の林地・農耕地との繋がりがあるためと考えられた。

・昆虫相

昆虫はライトトラップ・ピットフォールトラップ・マレーゼトラップ・チョウ類のラインセンサスなどを行っている。これらの結果を他地域の里山林などと比較すると、「龍谷の森」はガ類の個体数は少なく（谷垣, 2005）、チョウ類の多様性も低く（遊磨ほか, 2006）、オサムシ科昆虫の多様性も低い（谷垣, 2008）ことが分かった。この理由は、植生の遷移によるモザイク構造の消失と、水環境の貧弱さだと考えられた。